
聖夜の恋人たち

浅葉りな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

聖夜の恋人たち

【Nコード】

N2843C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

「不器用な彼ら」シリーズ。クリスマス記念のSSです。

クリスマスなんて、好きじゃない。

街を埋め尽くすイルミネーションや、仲睦まじげな恋人たちを見ていると、寂しくてたまらなくなるから……。

おれたちは、あそこには混じれない。

みんなが浮かれるクリスマスにも、人目を忍んで会わなくちゃいけないんだ。いや、こういう特別な日だからこそ、余計に人目につかないようにしないといけない。

だから、今日は家にいる。男三人でのクリスマス・パーティだ。

おれは広岡久司。高校一年生。

今家にいるほかのふたり、榛名さんはおれの恋人で、恭介さんはおれの叔父さんだ。これだけだと、どうして人目を忍ばないといけないのか……って思うかもしれないけど。

問題は、榛名さん　フルネームで言うと榛名哲さんが、男だつてことなんだ。

おまけに、榛名さんはおれの担任で、古典教師。生徒が女だったとしても、付き合っていたらいけないような人だった。

でも、おれは別に不幸ってわけじゃない。

それなりには幸せだと思う。ただ、幸せっていうものはすごく痛い。今が幸せであればあるほど、未来を思うと痛いんだ。

もし、おれが男じゃなかったら、ここまで悩んだりしなくてすんだんだろうって思う。

「どうしたんですか？　浮かない顔をしていますけれど」
隣に座っていた榛名さんが心配そうに言った。

きれいなバリトンの声に、胸がきゅっとなる。榛名さんは、俳優なんかやったらすごく人気が出たんじゃないかって思えるくらい整った顔立ち。男っぽい美貌で、見ようによつてはボーイッシュな女の子に見えなくもないおれとしては、すごくうらやましかったり

する。思わずキスをねだりたくなるようなくちびると妖しげな気分
にさせてくれる眼差しを目にするのがおれだけじゃないってこと、
ちよつと嫉妬しちゃうよ。

「なんでもないよ?」

おれはなんでもなさそうな顔を作って、いかにも楽しそうに声を
立てて見せた。

せつかく楽しくクリスマスを過ごそうって思ってるんだから、わ
ざわざ水をさすこともない。

おれたちの囲んでいるテーブルの上には、ケーキとかチキンとか
のパーティ料理が並んでいる。しかも、できあいのものじゃなくて、
全部おれの手作りだ。

「あ、久司、食べたらちよつと出かけてくるからねー。今日は帰ら
ないかも」

スぺアリブをかじりながら言ったのは恭介さん。

恭介さんは榛名さんと違って、どこか軽薄そうな感じがつきまと
っている。脱色した金髪を無造作に束ねているからかもしれないし、
口許をいつも笑ませているからかもしれない。柔道と空手の有段者
のくせして、着やせしているからあまり強そうにも見えないし。

「……どこに行くつもり?」

おれの両親は離婚していて、どっちにも迷惑をかけない条件とし
てこのマンションをもらいうけた。学費や生活費は当然両親から出
ている。そんな中に恭介さんは転がり込んできたわけだから、一応
おれに監督義務があるんじゃないかと思う。

まあ、世間一般の常識に照らし合わせて考えれば、どうして二十
六歳の叔父さんを十六歳の甥が監督するんだって気もするけれどし
ようがない。放っておいたら、恭介さんはなにをするかわからない。
普通、家賃を二年も滞納して追い出されたからってひとり暮らしの
甥の家に行こうなんて思わないだろう。

「ん、友達のとこ。だから、ふたりでごゆっくり」

恭介さんはチェシヤ猫みたいに笑った。

「そこまで気をまわしていただかなくとも、ぼくは帰るつもりでいたんですが」

「どうせ明日休みだし、泊まっていけばいいって。お邪魔虫は明日まで外出しとくから」

つまり。

恭介さんは、親切にもおれたちをふたりきりにしてくれようというわけだ。純粹な好意なんだろう。おもしろがってる部分もあるだろうけど。

「いいよ、そんな……」

「だーめ、もう約束しちゃったしー。徹夜で麻雀やるんだよ」

本当にこれは気を遣ってくれてるんだろうか、なんて一瞬疑ってしまう。

ほかの人ならともかくとして、恭介さんだったらありえそうだななんて思わせてくれるところが怖い。

「未成年をひとり置いていけないので、ついていてほしい、というところでしょうか」

「それいいね、採用。ってわけで、よろしくねえ」

恭介さんはすっかり決めてしまったようだ。こうなるとなにを言っても聞き入れてくれない。

おれは盛大にため息をついた。

これって、普通だったら喜ぶことなんだろうけど。

つきあいはじめてはや八ヶ月、榛名さんはおれに触れようとしな。軽い、子供同士の恋愛ゴツゴツって感じのキスしかくれない。これって、そういう関係にはなりたくないって意思表示なんじゃないかって思ってしまう。

結局、恭介さんは九時頃に出ていった。

ふたりきりになるのなんて、別にこれがはじめてじゃないはずな

のに、どうしてかおれは落ち着かなかった。

「あ、シャワー浴びてくるから」

言ってから気づいたけど、これってそういうことする前の恋人の会話っぽいよなあ、なんて。

榛名さんは苦笑するでもなく、ただうなずいた。

ぱっぱと脱いで、バスルームに飛び込む。仙台の冬は寒いから、ちよつとの間なのに鳥肌が立ってしまふ。

バスルームはひんやりとしていて、ちよつと湿ったにおいがした。足が触れているタイルはまるで氷みたいに冷たい。

シャワーノズルから吹きだしたお湯は冬の寒さと対照的にひどく熱かった。

別にそういうことがあるわけじゃないのに、念入りに体を洗う。

「なにやってるんだろ……」

上を向いて顔に豪雨を受けながら、おれはつぶやいた。バカみたいだ。

ひとりでこんなこと考えてるおれって、きつと変。

でも、榛名さんがおれじゃそういう気にならないかもしれないっていうのは一応大問題なわけで。

たしかに、ちよつとはさ、怖いってのもあるけど。ふつーだったら使わないようなトコ、使うわけだし。

それでも、榛名さんのこと好きだし。だから……っていろいろ、ある。

シャワーを止めて、バスルームを出た。寒いからさっさとパジャマに着替えて、榛名さんを呼びに行く。

榛名さんはおれの部屋に寝てもらうことになっていた。恭介さんがいないんだから、そっちで寝てもらえばって思うところだけど、ちよつと雑然としすぎていて客を泊められる状況じゃなかった。

「榛名さん、シャワー使っただらどうぞ」

と、ノックもせずにあけたドアの向こうでは、榛名さんが着替えていた。

「あつ……ごめん」

言いながらも、おれはそのまま立ちつくしていた。

榛名さんって、けっこう着やせするんだってはじめで知った。思った以上にがっしりしていて、なんか、おれよりもすごく男っぽいっていうか、なんていうか。

「別にかまいませんよ」

榛名さんは微笑みながら上を着た。恭介さんのパジャマ、替えがあつてよかった。無地の水色で、けっこう似合っていると思う。

「サイズ、どう？」

「ちよつと、そでが短いですね」

と榛名さんは言うけれど、そでだけじゃなくって足のほうもたりていない。

「一晩だけだし、ごめん」

「いえ、泊めていただくんですから、贅沢は言えませんが」

ゆっくりと榛名さんはおれのそばまで歩いてきて、額に優しくキスをくれた。

「おやすみなさい」

ささやく声とともに吐息が耳たぶにあたつて、少しくすぐつたい。おれは戻ろうとした榛名さんの腕をつかんで、くちびるをとがらせてキスをねだつた。

……誓つて言うけれど、おれはいつもこんなことをしているわけじゃない。ただ、今日は特別な日だつて意識があつて、恭介さんが妙な気を利かせたものだからあんなことを考えていて。つまりは普通じゃなかった。

「今日は、積極的ですね？」

言った榛名さんの声には、嬉しそうな笑いも混じっている。いやがつてはいないんだろ。

「いいだろ、そういう気分なんだから」

「もちろん、大歓迎です」

榛名さんのキスは、いきなりくちびるに降りてくることはなかつ

た。まずは鼻先に、なにかのCMでやってたみたいなキスをして、ちよつとじらしてくれる。

目で拗ねて見せると、余裕綽々といった感じでくちびるを重ねあわせてきた。

でも、当然、重ねあわせるだけ。それ以上はなにもしない。

「……榛名さん」

ちよつと拗ねてみせる。

おれが欲しいものがわかっていているだろうに、榛名さんはそれを見事に無視してくれちゃう。出会ってからずっとそつだ。

「ねえ、おれのこと嫌い？」

「そんなわけありませんでしょう」

「じゃあ、キスして」

はつきりと口に出して求める。

「さつきしたじゃないですか」

おれはぶんぶんと首を振った。上目遣いに榛名さんを見上げながらすがりつく。

「違うよ」

部屋の中に榛名さんを押し入れて、後ろ手にドアを閉める。

「おれが言いたいのはそういうことじゃない」

「わかっていますよ」

「じゃあ、どうして？」

おれはベッドまで歩いていって腰かけた。

ついてきた榛名さんは、動揺した様子さえない。おれは緊張で手と足が同時に出汗になつてくるくらいなのに。

それが腹立たしい。余裕があるってことは、こういうことには慣れてるってことだから。

手を伸ばして、榛名さんの背中に触れる。あっけなく抱きよせられてくれた。

「あせつていらっしやるでしょっ？」

「ささやきは、どこまでも優しく優しくて。」

だから否定の言葉を口にできなかった。いや、もしかしたら凶星をさされていたのかもしれない。自覚はなくても、そういうことなのかもしれない。

「ねえ、久司さん。あなたは、きっと、大人の汚い部分ばかり見てきましたよね。両親の離婚だって、すんなりといったわけじゃありませんでした。だから、あなたは声を失って　ぼくに出会った」
おれは黙って聞いていた。別に、大人だから汚いだとかそういうことを思ってるわけじゃなかったのに。

そうやって、全部をひとくくりにして決めつけてしまうほどにおれは視野狭窄じゃない。

でも、両親の不和を見ていて愛なんて永遠じゃないって思ったことは事実だった。一度は、神の前で永遠の愛を誓いあったふたりでさえ、ああやって醜く争う。

永遠なんて信じられないし、信じるつもりもない。だからこそ榛名さんに愛されているんだっていう、確信みたいなものが欲しい。

「それとこれとは関係ないよ」

「関係ありますよ」

「……そんなに、おれのこと抱きたくない？」

むっとして言い返す。

「そんなわけありませんよ。ぼくだって、あなたを抱きたくて仕方がないことだって、あります」

榛名さんは、いささか強引にくちびるを重ねてくる。

またそれだけなのかと思いきや、やわらかい舌がくちびるを割り、歯列を割って侵入してくる。

榛名さんの舌はおれの舌を吸い上げ、水を得た魚のように口腔を荒らしまわった。もしかして、舌ってというのはこういうことをするためにあるんじゃないかって錯覚してしまうほどに。

「……んっ……ふ」

窒息しそうになって、声を漏らしてしまう。

逃げようと身を引いたおれの頭を、榛名さんが押さえた。

たつぷりと二分弱もそうしていただろうか、余韻を残しながらくちびるが離れていく。かすかな喪失感が残った。

「今だって、このままあなたを押し倒してしまいたいですよ。でも、あなたは気ばかりあせっていて、準備ができていない状態だと思っています」

くす、と笑って、榛名さんはおれの額を指で弾いた。

「だから、これくらいのキスでそんな顔になるんですよ？ 興味半分、恐怖半分って顔です」

「そんな」

言いかけたおれの口を手でふさいで、榛名さんは続けた。

「ぼくはいつまでも待っていますよ。あなたが、自分の気持ちに折り合いをつけて、ぼくに抱かれてもいいと思ってくださる日まで。何年だってかまいませんから」

そうして榛名さんがくれたキスは、いつもどおりの優しさと深さだった。

「ぼくは、なによりも久司さんが大切なんです。ほかのなにをうちやっってしまったてもかまわなくらいに。あなたを損ねたくありません。たとえ、髪の毛のひとすじたりとも」

「榛名さんって、キスうまいよね」

結局、榛名さんがおれに触れないでいたのは、いろいろとおれのこと考えてくれてたからだったのは、なんとか納得した。けれど、ちよつと照れくさかったから、おれはわざと関係ないことを言っただけで、拗ねてみせる。

「ええ、あなたのためにうまくなっただけです。毎日、ぬいぐるみ相手に練習してるんですよ」

ウサギのぬいぐるみに向かってキスの練習をしている榛名さんの図をリアルに想像して、おれは吹きださないようにするのに苦労した。

口を押さえて、榛名さんを見上げる。

「じゃあ、いつしよに寝ましようか？ それとも、狭いですか、こ

「こにふたりは」

榛名さんがぼんぼん叩いたのはおれのベッド。ごく普通のシングルだから、男ふたりで寝るには少々手狭だ。

でも、おれはうなずいた。

先にふとんにもぐりこんで、わくわくしながら榛名さんを待つ。

すべり込んできた榛名さんは、おれをすっぽりと抱きしめてくれた。ちょうど榛名さんの胸元におれの頭がきている。規則正しい、でもちよつと速めの鼓動が聞こえた。

「おやすみなさい」

おれの言葉に、榛名さんはキスで答えた。

で、幸せな一夜を過ごした　　といえは過ごしたことになるんだろうけれど。

目覚めたときにはなんだか熱っぽくって頭も痛いし気分は最悪だった。

風邪、ひいたらしい。

髪濡れたまんま寝たんだから当然か。隣の榛名さんも、目は覚めてるみたいなんだけど、ぼーっと天井眺めてて具合悪そう。

「もしかして、風邪かな……？」

「多分、そうでしょうね」

顔を見合わせて笑う。

これって、笑いごとじゃないのはわかってるんだけど、笑う以外になにしたらいいかわからない事態ではある。

「ただいまー、どうだいおふたりさん」

待ち構えていたかのように恭介さんが入ってくる。いや、これは絶対待ち構えていたに違いない。

「風邪ひいた」

身を起こしてうめくように言うと、恭介さんは微笑みさえ浮かべ

ながら答えた。

「夫唱婦随。」

おれは脱力してへたり込んだ。

「それもいいんですが、とりあえず、このままではまずいですね」

榛名さんは妙に冷静に指摘する。シングルベッドに病人ふたりは、たしかにまずい。

「ソファ持って来ようか？」

恭介さんの提案に、おれは黙ってうなずいた。ここから恭介さんのベッドまで這っていくのはいやだし、恭介さんにお姫さま抱っこされていくのもいやだから。来客用のふとんを敷くスペースは、ここにはないし。

「ん、お願い」

ひとり運ぶのは大変そうだけど、手伝おうにも体がだるい。今度埋めあわせしようって心の中で思いながらお任せしてしまうことにした。

そうして、恭介さんは律儀にもソファを引きずってきてくれた。毛布とふとん付きだ。

普段は頼りない叔父さんだけど、こういうときにはありがたい。

「でも、ごめん」

榛名さんに向かってつぶやく。うとうとしていそうだから、起こしたら悪いだろうと思って、わざと小さく。

「いいですよ」

思いがけず、答えが返ってくる。

「起きてたんだ？」

「いえ。でも、ぼくが久司さんの声を聞き逃すわけありませんですよ」

しれっとおれが赤面しそうなことを言ってくれる榛名さんがちょっと好きだ、なんて思ってしまふ。いや、ほんとはすごく好きなんだけど。

「また、すぐそういうこと言って」

「いいじゃありませんか。今は、ふたりきりですよ？」

「熱上がるつてば」

そうでも言わないと、ベッドから起きだしてきて耳元でささやいてくれそうな勢いだった。

「はい、邪魔してごめんねえ」

またまた恭介さん、ちよつどいいタイミングで現れる。手には湯気のたつている器がふたつのつたおぼん。

珍しく、料理までしてくれたらしい。

「うわ、恭介さん、ありがと」

ことさら大きな声で礼を言うと、恭介さんはウインクで答えた。やっぱり、ちよつとは前後の状況を把握しているらしい。

「おかゆ作つてあげただけだ。食べる？」

「食べる食べるっ」

「ありがとうございます」

このときばかりは、恭介さんが神様に見えた。食べてる間は榛名さんも大人しくしてくれてるだろうし、お腹もすいてきたところだ。

アツアツのおかゆを受け取つて、小さなスプーンで口に運ぶ。

「……………」

絶句。

おれは、榛名さんと顔を見合わせる。熱っぽそうで表情がはつきりしないけど、たしかに榛名さんは苦笑していた。

どうやら、同じ気持ちでいてくれるらしい。

いやあの、すごーく、好意自体は嬉しいです。

めつたにやらない料理までしてくれたのにも感嘆してます。

でも……恭介さん。

お願いだから、おかゆに砂糖はいれないください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2843c/>

聖夜の恋人たち

2009年3月24日09時50分発行